世界に通じる環境規格〝ISO〟
生協多摩店が取得

世界共通の環境規格である「ISO14001」の認証を中大生協の多摩店が取得した。最近、テレビや新聞でもよく目にする「ISO」という言葉だが、正直いってさっぱり分からない。そこで「ISOとは、いったいなんなのか」「なぜ、中大生協が認証を受けたのか」といったところから、理事・総務部長の大森潤一さんと同部職員の石坂康一さんに聞いてみた。

先ず「ISO14001」とは、国際標準化機構（ISO）が取り決めている環境関連規格「ISO14000シリーズ」の一つで、具体的には生産・サービス・経営に際して「環境に配慮したシステムが整備されている」ことを意味し、審査に合格すれば認証取得企業として登録される。また、認証は同時に「経営のコストが抑えられ、効率のよい経営システムである」というお墨付きを与えられたことになる。

中大生協がこの資格を取得するまでの経過は、ざっと次のようなものである。本格的に環境保全活動に取り組んだのは95年のことだった。最初に環境問題組織委員会を設置、資源のリサイクル問題について真剣に考え始めた。また、「多摩川河川敷清掃」「リサイクル展示会」など、積極的に環境問題に係わってきた。それらを通し、生協全体で環境に対する配慮をしていきたいという思いが強まり、99年6月に「ISO14001」の認証取得へ動き出した。

外部講師を招いての勉強会が昨年12月まで続き、ことし4月に書類審査、6月には初動審査、そしてこの夏の2日間の本審査を受けて、認証にまでこぎつけた。この際、さまざまな〝証拠〟を要求された。例えば「職員一人一人の環境に配慮する行動に対して、意識があるかどうか」も、職員を通して審査された。

こうして認証を受けた生協の〝その後〟は、どう変化するのか。環境への負荷の削減に向けての研究はすでに始まっている。例えば、職員の制服はペットボトルをリサイクルしたもので作られている。また、ことしの白門祭の出店で使われた皿は、使い捨ての紙皿ではなく何度も使えるプラスチック皿が使われた。しかし、この皿は洗っただけでは保健所からは許可されない。そこで生協が食器の熱処理作業を手伝うことになった。また近く、再生紙などを利用したエコ商品の販売もする。

認証を手にする大森さん（右）と石坂さん

「ISO14001」の認証を受けると、それで終わりではない。これからもゴミの量を減らすなど環境面への配慮、ガス・水道の使用量削減計画の具体化を図る。

そこで「大学における環境面で、私たちもできる一番手っ取り早いことは？」とうかがったら、「ゴミをきちんと分別して捨ててほしいですね」と即答された。確かにキャンパス内には、燃えるゴミ、燃えないゴミ、ビン、ペットボトルを区分けして捨てるゴミ箱がありながら、現状ではかなりメチャクチャに放り込まれている。分別されてあるはずのゴミをもう一度、分別し直さないと処分に出せないそうだ。

こういうことは私たちがゴミを捨てる際の、ほんのわずかな心配りで改善される――大森さんや石坂さんの話を聞いてみて、環境に対する活動は、生協という「組織としての取り組み」と、学生という「個人としての姿勢・マナー」が組み合わさることで、成果はより大きくなるものとわかった。環境は目には見えないところから、改善されるのかもしれない。

（学生記者・大谷秀之）